

## 白杵歴史探訪

齋藤 哲

平成二十七年十一月八日九時、別府史談会会員四十二名を乗せたバスは、別府駅裏を出発した。雨天の予報は見事に外れ、暖かい旅行日和になった。

最初は白杵歴史資料館に行った。展示室一の床一面の豊後国の古図には圧倒された。館長の情熱的な説明に引き込まれたが、時間に追われ、駆け足での見学になった。特に近世絵図資料群は、全国有数とのことであり、地方の小大名がこれほどの物を収集した理由を知りたいと思った。

次は白杵城跡に登った。この城は弘治二年（一五五六）大友宗麟が家臣の謀反により本拠地の府内から逃れ「より一層安全を図るために新しい城に引きこもった」ものである。城は白杵湾に浮かぶ丹生島に建つ北・東・南が海に囲まれた天然の要害であった。大友氏改易後は、福原直高、太田一吉が城主になり、関ヶ原合戦後は美濃から稲葉氏が入封し廢藩置縣まで十五代にわたり白杵藩を統治した。現在は、桜の名所として市民の憩いの公園になっている。ただもう少し見栄え

良く整備できないものかと思った。

次に白杵城跡から歩いて稲葉家下屋敷に向かった。この屋敷は、廢藩置縣により東京に移住した旧藩主・稲葉家の白杵滞在所として、明治三十五年に建設された。この辺りは、江戸時代は白杵藩の三の丸であり評定所・米蔵・重臣の屋敷等が連なっていたらしい。大書院・御居間・台所・土蔵・御門・外堀等武家屋敷様式を留める大規模な建物であり、庭園も素晴らしい。

稲葉家下屋敷から、江戸時代の風情の残る唐人町・浜町などを通り野上弥生子文学記念館に行った。野上弥生子は明治十八年酒造業の小手川角三郎の長女として生まれた。弥生子は学校教育・国文・漢文・英語の個人レッスンを受け、十四歳で上京し明治女学校に入学した。卒業後同郷の野上豊一郎と結婚し、夫の師・夏目漱石や門下生、芥川龍之介などと交流し創作活動を始めた。処女作『縁』以降、『海神丸』『大石良雄』『真知子』『迷路』『秀吉と利休』等多くの名作を書き、文化勲章を受章、長編『森』を九九歳で逝去するまで書き続けた「奇跡の作家」である。

記念館には、弥生子の勉強部屋や直筆原稿、遺品、漱石や文人達の手紙等約二〇〇点が展示されている。明治の女性ら

しく端正にして慄然と生きた野上弥生子を偲ぶことが出来る。

最後は、深田の白杵石仏を巡った。私は、今までに数回訪ねているが、何度来ても不思議で魅力的な仏達である。平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫られた六十余体もの磨崖仏群は、誰が何を目的に造営したのか、不明であるとは、信じられないことである。昭和五十五年から十五年間に及び永年頭部のみの姿で親しまれた大如来像の胴体との一体化、防水、コケ類除去等の様々な保存修復工事が行われた。平成七年白杵磨崖仏四群五九体が、磨崖仏では日本初、彫刻では九州初の国宝に指定された。木彫のような彫刻技術は、京都の仏師達が関わったのではないかと言われている。永年頭部のみの切れ長の目、端正な口元、気品のある表情で親しまれた、古園石仏中尊の大日如来像も元の姿に戻り、落ち着いた威厳と平穏さを湛えていた。

白杵の旅は、歴史の深みを感じられるものであった。年月が自然に醸し出す重厚さが町の至る所に漂っていた。小さな城下町であるが、代々住む人々が町を誇り、愛しながら必死で守り、磨いてきた「良い町」であると思った。



稲葉家下屋敷



白杵石仏